

## 「インディアン・キャンプ」小論

山田 康夫

「インディアン・キャンプ」はポレミカルな作品である。ニック・アダムズシリーズのひとつであり、サイクル小説として他の作品との関係から論じられたり、また主人公ニックの経験の中にはヘミングウェイ自身の経験が反映されていると考えられるだけに、ヘミングウェイの生涯との関係性から論じられることも多い。しかし、ただ単に論じられることが多いだけではポレミカルとは言いがたい。いわゆる古典、名作と呼ばれるようなものは現在に至るまで無数に論じられているのが普通だからだ。では何故この作品がポレミカルなのか？それはこの作品には「単純さの中の謎」とでも言うべきものがあるからだ。作品自体はニックと父、そしてジョージ叔父の三人がインディアン部落にお産の手伝いをしに行く、そこで麻酔がなかったため、麻酔なしで帝王切開。しかもナイフと釣り糸で行うという乱暴さだ。手術は無事成功し、医者である父はすっかり自分の成功に酔っており興奮冷めやらぬ状態。しかし、この興奮は足を怪我してベッドの上段で寝ていた夫の自殺ということですっかり醒めてしまう。息子にいいところを見せるつもりが、期せずして息子にインディアンの自殺を見せてしまうことになり、完全に打ちひしがれてしまうのだ。その後父と子はボートに乗って帰っていくのだが、その時、息子であるニックは何故か「自分は死なない」という確信を持つにいたる、というものだ。

作品全体のテーマといった観点からは、もちろんある種イニシエーション

的な読み方も可能であろうし、また後に述べるように、フェミニズム、ポストコロニアル的な読み方もあり、それなりに説得力に富んでいる。テーマは別に何であつてもかまわないのだ。しかしながら、個々のシーンを考えてみると、突然よくわからなくなってしまう。特に何故インディアンの夫は死んでしまったのかが、大きな謎となつてしまっている。この「夫の死」というものがなければラストのもうひとつよくわからない、といわれることの多い「僕は死なない」という確信にも似たニックの強い想い、が生きてこないわけであり、それゆえ夫の死は必然でなければならない。しかし、この夫の死が謎であるだけにたちが悪い。何故死んだのか皆目見当がつかず、誰もが納得するような答えが出ていない状態が続いているのだ。今回のこの小論では屋上屋を架す、になることを恐れず、この謎について考えてみたい。結論を先取りすると、状況から考えられるものと、創作上の理由の2つがあると思われるが、まず最初にこれまでどのように考えられてきたかを見てみよう。

## I. どう読まれてきたか。

まずインディアンの夫の死がどのように考えられてきたか見てみよう。第一に挙げられるのは「擬婉」という考え方である。これは Meyers が主張しているもので、インディアンの風習の中に、夫は妻の出産を擬似的に経験する、すなわちその苦しみを分かち、というものがあつたらしい。「インディアン・キャンプ」の中で自殺する夫はその「擬婉」に絶えられなかったために死んだというものである。彼はフェミニズム的、ポストコロニアル的、精神分析的な批評などを、すべて論破し？、最終的に考えられるのは「擬婉」である、という結論に達している。Meyers は同じ論文の中でヘミングウェイがインディアンに関する本を 57 冊持っていたことやフレイザーなども読み人類学的素養があつたことなども指摘しながら、ヘミングウェイがインディアンの文化、風習などに精通していたことなどから、そう結論付けたのだ。彼の論

文の結論部分を見てみよう。

The crossing of forbidden lines in dangerous situations exposes men and women to contamination and evil that cause sickness and death. The Indian husband has remained in the room to affirm his fatherhood, to share his wife's pain, and to protect his child. But the *couvade* ( the hidden part of Hemingway's iceberg ) is not effective and the wife remains vulnerable. The white men, summoned by the desperate Indians but ignorant of their customs, not only violate the sacred confinement of the woman in childbed, but are forced to treat her brutally and to use a hook ( as if she were a squirming fish ) to sew up her stomach. ... The husband cannot bear this defilement of his wife's purity, which is far worse than her screams. In an act of elemental nobility, he focuses the evil spirits on himself, associates his wife's blood with his own death wound, and punishes himself for the violation of taboo. (注1)

つまり、この自殺した夫は本来「擬婉」を通じて妻と子を守る、悪霊から守るという役割を担っていたにもかかわらず、白人の介入を許してしまい、家族を守れなかったから、死を選ぶしかなかった、というものだ。そしてそれは“His throat has been cut ,,,” (20) という描写を見てもわかるようにこの作品の中で夫は受難者なのだ、と同じ論文の中で主張している。(注2) 非常に説得力があるといえよう。これで決まり、という感じがしなくもないが、それでもやはり、死を選ぶ、というところになると、どうも腑に落ちない。特にこの時の周りの状況を見るとあまりに、ある意味、のんびりしているのだ。ヘミングウェイは実際インディアンと深い付き合いもあったようだし、その文化に精通していたかもしれないが、だとしたら作中の夫以外の登

場人物たちもある程度「擬婉」を知っていたらうし、特にインディアンたちはインディアンだからというまさにその理由でそれを熟知していたはずである。しかし、この者たちの態度はどうか？とても「擬婉」というものを知っている態度とは思えない。あまりにお気楽なのだ。この作品中の男たちの態度を見ると出産の現場にいない者たちは悲鳴が聞こえないような場所でたむろしてのんびりタバコをふかしており、一方ニックたちの助手の役割を果たしているインディアンたち — 彼らは女が暴れないように手足を抑えているのだが — は一緒に腕を押さえていた叔父のジョージが女に腕をかまれると大笑いしているのである。このような状況からただ一人苦しみの果てに自殺する夫というものはどうにも受け入れがたい。つまり、この「擬婉」という考え方はそれなりに説得力はあるものの、最期の一点、夫の死、という点で少々弱いのである。もちろんこの自殺した夫だけが、異様に神経が細い、など、他のインディアンたちと違うという設定ならばそれももしかかもしれないが、どうもいただけない。先ほど引用した“His throat has been cut,”もそう考えると、Meyersの深読みとしか思えない。単に距離感を持たせるため、つまり夫に対する感情移入を防ぐためとも考えられるのである。こうしてみると、彼が「擬婉」を主張する際にいったんはばっさばっさと切り捨てた他の読み方が息を吹き返すのも当然といえば当然であろう。では次にその中から代表的なものを見てみよう。

それはひとつは白人の暴力に対する抗議、という考え方である。これは主にフェミニズムやポストコロニアリズム方面からの主張であり、男性—女性、白人—インディアン、などの対比（支配—被支配の関係）また、麻酔なしの帝王切開ということは、必然的に暴れるのを防ぐために数人がかりで押さえつけるということになるわけだが、これがレイブを連想させる、などなど、様々な観点から論じられている。（注3）これらはすべて否定する必要もなく、そのとおりであろう。特に医者であるニックの父の手術後の興奮を見ると、まさに白人の男性の側からのいわば独りよがりの興奮が実によく伝わっ

てくる。

He was feeling exalted and talkative as football players are in the dressing room after a game.

“That’s one for the medical journal, George,” he said. “Doing a Caesarian with a jack-knife and sewing it up with nine-foot, tapered gut leaders.” (20)

もし相手が白人の女性だったらそもそもこんなことをしたのか？という点からも、この場面に階級的なものを見出す読み方はそれなりに説得力がある。しかしながら、だからといってこのようないわば差別に対する抗議として死を選ぶ、というところまでいくと、少々うがちすぎではないかと思ってしまう。実際そのような論文の中ではこの夫はいわばヒーロー的に論じられ、誇り高いインディアンの夫として妻がそのような目に合わされても何もできない自分に対して云々というものがあるが、、(注4)、すっかり滅亡寸前まで追いやられ、いわばゲッターに近い状態の中では誇りも何もあったものではないだろう。一步譲って「誇り」が問題になるのであれば、真に誇り高い人間にとっては「復讐」が必要になるだろう。それは決して自分に向くものではない。自分を殺して抗議するというのは、現代でも特に焼身自殺などでアピールするというものはあるが(チベットなど)、妻の出産の際に喉を掻っ切るというのは何に対する抗議なのかよくわからない。自分に対する情けなさ、というのであれば少しはわからないではないが。

次に見る考え方はさらに複雑なものであり、これまで見てきたものと重なっている部分はあるが、この夫はいわゆるコキュ(寝取られ夫)ではないのか、というものである。この考え方は特にニックの叔父であるジョージに焦点を当てた考え方である。この日のジョージの行動はニックと父とは別に、インディアンたちのボートに乗って部落に行く、部落に行ってから他のイ

ンディアンたちとともに女の体を押さえつけ、その際には思い切り腕をかまれたりもする。

... when he started to operate Uncle George and three Indian men hold the woman still. She bit Uncle George on the arm and Uncle George said, “Damn squaw bitch!” and the young Indian who had rowed Uncle George over laughed at him. (18)

このやり取り、その際のインディアンの笑い、そして帝王切開のあと、ニックと父はさっさと家路に着くわけだが、ボート上での父とニックの会話から、どうもジョージはそのまま部落に残っているようであり、ジョージとインディアンとの親しさを感じることができる。父とニックの会話を見てみよう。死に関する話の途中で突然ニックはジョージを話題に出す。

“Daddy?”

“Yes.”

“Where did Uncle George go?”

“He’ll turn up all right.” (20-21)

ただ「いない」ではなく父の叔父に対するコメントにはもしかすると「触れないでおこう」という意図が含まれていると読めるのかもしれない。

またこの説を主張する人たちはこの作品と本来ひとつであるはずだった前の作品、「三発の銃声」を根拠として叔父とインディアン女の関係の深さを指摘する。(注5) たしかにこの「インディアン・キャンプ」の前の状態を描いたといえるこの作品の中では叔父とインディアンの関係が想像される。ニックはここではじめて叔父から「あいのこ」(注6)という言葉聞くのだ。この様子から言っても、また出産の後まで部落にいるらしいことなど、いろ

いろいろ考えるとこの可能性も捨てがたい。

しかしそれならば何故麻酔なしの帝王切開なのか？釣りをしているときに急に呼ばれ、仕方なくやったといえればそれまでだが、それにしてもこの作品の中で父の叔父に対する態度からはこのインディアン女がジョージと関係のある女だということを思わせるような扱いが全くない。ほのめかしすらないのだ。女が悲鳴を上げてても“...her screams are not important. I don't hear them because they are not important.” (18) 要するに「聞こえないと思えば聞こえない」ということすら言うのだ。先ほども触れたように、最後のニックとの会話の中に、ほんの少し深読みすればそうかも、と思われる節はあるとはいえ、それは単にジョージとインディアンたちの関係の近さを示しているに過ぎない。なによりインディアン部落の人々のジョージに対する態度からは全くそのようなものを感じさせるものがない。女は確かに腕を噛むがそれはジョージが腕を抑えたからであり、女が錯乱状態だったからだろう。そもそも噛まれたときの他のインディアンたちの態度には不自然さがない。さらに言うならば出産後夫の死を目撃するわけだが、もし夫の死が自分のせいだとするならばジョージ叔父がそのままそこにいるのは逆に不自然ではないだろうか。叔父とインディアンたちはどう見てもいわゆる良い関係なのであり、本当に女と関係があり、かつ夫がそれを知っていて、、、というのは少々無理があるのではないか。もし、仮にニックのいた世界では白人とインディアンが完全に分離しており、人間一奴隷の関係だったとすれば、そのような可能性もなくはない。しかし、たとえば同じくニック・アダムズ・シリーズの「十人のインディアン」や「父と子」で見られるように、ニックはインディアンに恋をし、失恋もしたりする。インドのカーストのような徹底的な上下関係といったようなものは少なくともこのシリーズの中では存在していないのである。(注7) それゆえジョージ叔父とインディアン女はできており、本当は自分が寝取られ夫であり、それに対する抗議、もしくは仲間間の笑いものであることに耐えられなくて自殺、というのは少々無理がある

のではないだろうか。

これまで主に3つの考え方、つまり1. 擬婉、2. 社会的差別に対する抗議 3. 叔父が本当の父親であることに対する絶望、を見てきたが、すべて一見説得力があるように見えるものの、よく考えてみれば、どれもこれも牽強付会というか、どこか無理がある、では他に何かあるのか、それともこの3つの組み合わせから考えるべきなのか、夫の自殺は結局のところ謎のままなのか、これからさらに考えてみたい。

## Ⅱ. 怪我、悲鳴、そして湖へ

ではここからは何故インディアンが自ら命を絶ったのかについて自分なりに考えてみよう。これまで見てきたような考え方はそれなりに理解できるし説得力もあるのだが、すべてはある意味理詰めなのであり、そこに違和感を覚える。こうこうこういう理由で何月何日に、、、という類の自殺はめったにあるものではないだろう。また人生いわく不可解、的な自殺もあまりないだろう。ましてやこのインディアンの夫が誇り云々で自殺するというのは、それだけでは理由として弱いのだ。もし誇り云々というのであれば、既述のように自分にではなく、相手に向かうものだろう。自殺というものが自分に対する殺意である以上、やはりそこには何か後ろからその本人を押しもの、きっかけがなければならない。理屈だけではない、最後の一瞬自殺の実行に至るためには何らかの力が働かなくてはならない。引き金がなければならないのだ。ではその引き金はいかなるものなのだろうか。

ここでもう一度自殺が行われたその部屋の様子を見てみよう。ここで注目すべきはその様子であり、位置関係だ。女が二段ベッドの下段で苦しんでいて、夫が上段で足の怪我をして横たわっている。

Inside on a wooden bunk lay a young Indian woman. She had been



trying to have her baby for two days. ... She lay in the lower bunk, very big under a quilt. Her head was turned to one side. In the upper bunk was her husband. He had cut his foot very badly with an ax three days before. He was smoking a pipe. The room smelled very bad. (17)

夫は煙草を吸っている。彼は足をひどく怪我しており、しかも3日間苦しんでいる妻の真上にいるのだ。そしてこの部屋のひどい臭いは煙草が大きな理由であるが、このときの煙草はいかなるものかということが問題だ。煙草はインディアンたちによって様々な使われ方をしていたのは周知の事実であるが、このときには夫が木を切ろうとして怪我をして3日間ベッドに横になっているのであり、しかも苦しみ続ける妻の真上にいて悲鳴を聞き続けているのだ。ということはその痛みをやわらげるため、精神的に落ち着くための煙草である可能性がある。(注8) またここからは想像になってしまうが、鎮痛作用をもったものとしてはある種、麻薬のようなもの、たとえばペヨーテのようなものなどが使われていた可能性もある。(注9) つまり、ただ単に横になっていたのではなく、薬や麻薬のようなものでぼうっとしていた可能性が高いということだ。彼はある種、酩酊状態にあったのではないだろうか。だからこそそれが最後の引き金になってしまったのではないか。もし彼が怪我などしていなければたとえ擬娩であったとしても死ぬなどということもなかったし、また仮に誇り云々が問題であったとしても殺意が自分に向いてしまうこともなかったのだ。いわば精神的に落ちていたがゆえに、普段なら耐えられることに耐えられなくなってしまい、妻の悲鳴、自分の無力感などが複雑に絡み合いながら一気に自分に降りかかり、それを受け止める力がなかったがゆえにある意味、どうしてもよくなって一線を越えてしまったのではないか。いっそのこともっと重傷だったら死を選ぶこともなかったのではないだろうか。

更に敷衍すると、いわば落ちてしまっていた状態だっただけに、その時の

ある種の錯乱状態、男たちが妻を押さえつけ云々の状況の中で、いわばパニック状態になり、そのなかで「I」で述べたように、インディアンと白人の関係、己の無力感などが頂点に達してしまったのだ。それゆえ例え擬婉などという文化的伝統に則った経験をしていたとしても — それは本来死ぬことなどなかったはずだが — もはやそれに耐えることもできず、何から何までどうでもよくなり、とにかく今の状況を終わらせること、今自分が感じている痛み、恐怖、屈辱、もろもろの感情をすべて一気に終わらせるもの、そのために剃刀で一気に自らの喉を掻っ切ったのではないだろうか。これらはすべて異常な状況の中で起こっていることであり、いわば「オルフェ的」「カーニバル的」(注10) 熱狂の中で死へと向かってしまったのだ。彼はいわば向こうの世界からこちらの世界へ戻ってくることに失敗し、行ったきりになってしまったということなのではないだろうか。

そしてこれがわかればこの作品のもうひとつの謎ともいえるあの「自分は死なない」というニックの気持ちの意味がよくわかる。ニックは何故インディアンの夫が死んだかを感覚的に捕らえた、もしくはわかったような気がしただけに、「自分は死なない」ということを強く感じるのだ。言語的に、つまり論理的にきちんと理解できなくとも、子供の視点から何らかの暗闇を覗いてしまった、少なくとも触れてしまったと感じたがゆえに、ニックは恐怖を感じ、その結果として父に「死」について尋ね、最終的に自分は死なない、自分は負けない、という気持ちになったのではないか。ラストシーンを見よう。

“Do ladies always have such a hard time having babies?” Nick asked.

“No, that was very, very exceptional.”

“Why did he kill himself, Daddy?”

“I don’t know, Nick. He couldn’t stand things. I guess.”

“Do many men kill themselves, Daddy?”

“Not very many, Nick.”

“Do many women?”

“Hardly ever.”

“Don’t they ever?”

“Oh, yes. They do sometimes.”

...

“Is dying hard, Daddy?”

“No, I think it’s pretty easy, Nick. It all depends.”

...

In the early morning on the lake sitting in the stern of the boat with his father rowing, he felt quite sure that he would never die. (20-21)

彼は死がどのようなものであるか、言い換えると死そのものを垣間見てしまった。死という全くの闇を感じてしまったがゆえに、男は死ぬのか、女は死ぬのか、などなど父に確かめずにいられなかった。つまり、このインディアンの死があつてこそそのラストシーンであり、自分は死なないという強い気持ちであり、それは帝王切開、男たち、女の叫び声など狂ったような状況を経たあとでの静かな湖の上で、自分はその状況から戻ってきた、という安堵の気持ち、そして内側から湧いてくるような、自分は負けない、という静かな決意のようなものを感じたがゆえに、「自分は死なない」と確信したのだ。

### Ⅲ. ミニマリストまたはスパナの論理

ここまで述べてきたように、「インディアン・キャンプ」は作中何故インディアンの夫が自殺するのか、何故ニックは最後に自分は死なないと思うのか、などなど、謎がいくつかある。批評家、学者などがそれをどう読み解いているかを探るのもこの作品の持つ楽しさ — もちろんヘミングウェイは意

図しなかつただろうが — の一つである。では何故このような謎が残り、様々な人がそれぞれ独自の読み、解釈を行うことができるのか？それはヘミングウェイの文体によるところが大きい。彼の文体は短いセンテンスの積み重ね、しかも無駄を一切排除した元祖ハードボイルド的な文体であり、アメリカなどの学校（大学など）での作文の見本テキストには必ず載るほどのものだ。実際ヘミングウェイの後の作家に与えた影響の大きさはここで論ずるまでもなく周知の事実である。（注11）

しかしながら、この無駄を極力排除した切れのいい文章、実はこれが問題なのだ。確かに読みやすく、しかも余韻を残すという点ではいくら賞賛しても仕切れないほどだ。しかし、これはあえて極端な例を引くと日本の俳句のようなものではないか？たとえばあの有名な「古池や、、、」のうたでも、じつはあの蛙が飛び込んだのかどうかははっきりしない。だからこそ様々な解釈を呼び起こし読むものに深い味わいを与えるともいえるのだが。

こういった点から考えると、ヘミングウェイのあの文体は小説でありながら、一切の説明的なもの、解説的、なおかつ謎解きのものを排除しているがゆえにいわば「散文で書かれた韻文」のようになってしまっているのである。昔ながらの小説、たとえば18世紀、19世紀の英国小説なら実はこうだったという説明、種明かしで読者を驚かせたり感心させたりもするのだが、ヘミングウェイの「インディアン・キャンプ」はその対極に位置する作品なのである。今でこそミニマリストという用語があるが、ヘミングウェイはいわば元祖ミニマリストといえる存在である。

そして、そのような観点に立つと、実はインディアンの死というものも、もう一つの可能性を持っていることに気づく。それは物語上の必然としての死であり、創作上必要とされた死だということだ。仮に彼の死が存在しなかったとしたらどうか？手術の成功によって単なる、それこそひとつの思い出、スケッチ的な作品になってしまう。ここにあえて夫の死を挿入することによっていわばジェットコースター的な上がり下がり、その後すべてが終わっ

たあとでのその対比としての静かな湖のシーン、ひんやりとした空気の中での温かな水の感触、というシーンへとスムーズに移行していくのだ。つまり、この作品は確かにニックの通過儀礼の物語であるが、インディアンの夫はそのための生贄だったのである。ニックにとって必要だったがゆえに彼は作者によって死を与えられなければならなかった。しかもぎっくりとのどを切り裂くという衝撃的な死を選ばざるを得なかったのである。

He (ニックの父) pulled back the blanket from the Indian's head. His hand came away wet. He mounted on the edge of the lower bunk with the lamp in one hand and looked in. The Indian lay with his face toward the wall. His throat had been cut from ear to ear. The blood had flowed down into a pool where his body sagged the bunk. His head rested on his left arm. The open razor lay, edge up, in the blankets. (20 カッコ内筆者)

この場面を見ても、向こうを向いたまま喉を大きく切り裂き、しかも体の重みでできた窪みにすでに血溜まりができていているという、まさに天国から地獄の様子が見事に描かれている。対比は衝撃的であればあるほど印象に残るのだ。しかもそこに一切の説明なし。そもそも何故夫のベッドに剃刀があったのかの説明すらない。傷を覆う包帯のようなものを切るためなのかどうかさえわからない。(注12) とにかくそのシーンだけが強く読者の心に刻み込まれることになるのだ。逆にここで説明があっては、読者はなるほどそうか、と思い、いわば読者の心の中で処理されてしまい、うまく心のどこかに収まってしまう。それによって印象は薄れかねないのである。説明なしの衝撃的なシーンを描くことによって読者はそれを消化しきれず、うまく処理できないまま宙ぶらりんにされる。しかし心の傾向としては何とか処理しようとする。意識的無意識的にかかわらず、そのことに引きずられてしまうのだ。そう考

えると、この描き方しかなかったように思われる。まさに見事な戦略であり、見事な作品である。

## おわりに

「インディアン・キャンプ」はこれまで数多く論じられてきたが、その一つの理由はインディアンの夫の死であり、ニックの自分は死なない、という気持ちであることはここまで述べてきたとおりである。これがなければこの作品はこれほど論じられることはなかっただろう。つまり、謎があるからこそ論じられることが多いのである。もちろん作品自体が面白いことは大前提であるが、それにプラス謎があるからこそ一層魅力的なものになっている。人は何故謎に惹かれるのだろうか。それは意味を求めるからである。人は人であるがゆえに常に意味を求める。謎というものは人を不安にさせる。(興味を起こさせるといっても良いが)。それゆえその「謎」をどう処理するかが問題になる。そして批評というものはこの謎解きの部分がかんりの部分を占めているといっても過言ではない。何故主人公はこのような行動をとるのか？作者の意図は？また作者の意図せざる意図は？社会的背景は？などなど無数の謎が生じる。読んでいけば自然に謎や興味がわいてきてついつい考えてしまう。そしてそれを自分なりに自分の中にきちんと収めようとする。うまく収まったとしても、それでもやはり他の人はどう考えているのだろうか？と気になって、また他の批評を読んでみる。それによって結果として何度も自分の頭の中を組み替えて、という具合にいわば無限ループに入ってしまう。これが批評のひとつの楽しみかもしれない。このように考えると、このインディアン・キャンプという作品は作者自身もわかっているのかいないのか、夫は死ぬわ、ニックはわけのわからない感情を抱くわで、読む側をなかなか楽しませてくれる。これはすべて、ぎりぎりまで表現を絞った結果であり、わけのわからなさをそのまま小説という形で提示したヘミングウェイの見事

な戦略といえよう。これからもこの作品について数多くの批評が生ずるだろう。新たな批評理論が出ればそれに則ったものが出るだろうし、そうならなくても様々なものが出てくる可能性が高い。しかし、あえて一言言えば、この作品はこれまで縷々述べてきたように、ヘミングウェイが一切の説明を省いたところが魅力であり、結局のところどこにもこれが最終の解釈だ、というようなものは存在しないのではないだろうか？登場人物自身自分の行動の理由はわかっていないようだし。読者はただ楽しむだけ、謎を抱えたまま楽しむことしかできないのかもしれない。

—テキスト—

Hemingway, Earnest. *The Nick Adams Stories*. 1972. New York: Scribner, 2003. 尚引用の後のカッコ内の数字はすべてこのテキストのページ数である。

—注—

注1) Meyers, Jeffrey. “*Hemingway’s Primitivism and ‘Indian Camp’*” *New Critical Approaches to the Short Stories of Earnest Hemingway*. Ed. Jackson J .Benson. Durham : Duke University Press, 1990. p. 308.

注2) Meyers, p. 308.

注3) Meyers の同論文の中で批判されている論文、たとえば Joseph Flora, *Hemingway’s Nick Adams* ( Baton Rouge; Indiana University Press, 1982 ) などを参照されたい。

注4) たとえば次の論文を見るとこの考え方が良くわかる。 木下高德、「ヘミングウェイの生と死 (二)」、跡見学園女子大学紀要 第32号、1999年、pp. 57-72.

注5) 前田は「「三発の銃声」に隠された不安の源」、という論文の中で、このような考え方は否定しきれものではないという態度をとっているが、例えばそうであっても「インディアンキャンプ」の解釈が根本的に変わるものではない、と主張しており、この考え方が一番正しいように思われる。 前田一平、「「三発の銃声」に隠された不安の源」、(日下洋介 編、ヘミングウェイの時代、彩流社、1989年、pp. 46-75)

注6) ニックは怯えから銃を撃ってしまう。父と叔父に対する言い訳を語る部分は次のように描かれている。“It sounded like a cross between a fox and a wolf and it was fooling around the tent,” Nick said. … He had learned the phrase “cross between” the same day from his uncle. (15)

注7) インディアンが先住民であること、それを卑怯な手で絶滅させようとしたことなどからも単なる人間-奴隷の関係にはなりづらい。インディアンは勇敢に戦ったのだから。また実際、「医者と医者妻」、中でもインディアンは医者であるニックの父親に対して割と強いのである。そして Meyers もこの点からジョージが父親だったら復讐するだろうと主張している。(Meyers, 301) そのとおりである。

注8) 上野堅實、「タバコの歴史」、大修館書店、1998年、p.21.などを見ても病気を治す働きのある煙草は実際にはないのではないかという精緻な考察があるが、大切なのは科学的事実より、文化的な事実であろう。また煙草に関する書籍をいくら読んでも体にいい煙草というのがなかなか見つから



ない。

注9) 可能性、といったが痛み止めを使うのは可能性としてはかなり強い。ペヨーテは古くから鎮痛剤として用いられてきたが、メスカリンを含んでおり、幻覚を起こすこともあるらしい。尚ペヨーテについては百科辞典より、ウィキペディアのほうが詳しい。

注10) 興味がある人は邦題「黒いオルフェ」(マルセル・カミュ監督、1959年)という映画を見てほしい。テーマなどは全く違うが、ある種の熱狂が非常によく表現されている。

注11) 柴田元幸はヘミングウェイと現代アメリカの作家たちとの関係を詳細に述べている。柴田元幸 「ヘミングウェイと現代アメリカ文学」(今村楯夫 編 「アーネスト・ヘミングウェイの文学」 ミネルバ書房 2006年 pp. 190-203.) 尚、柴田は実際の作品を吟味しながら、登場人物がそう思っているということがわかるだけで、その理由はその登場人物自身にもわかってないことがあり、これはヘミングウェイとカーバーの共通点のひとつであることを指摘している。(同書、pp. 199-200.)

注12) 時代、場所すべて違うが、三島由紀夫の「獣の戯れ」という作品を補助線にするとこの作品が見えてくる。三島は作中、すべての人間関係を新しい段階に入れるため、(完成させるため?) 突然スパナを持ち出し、スパナを象徴的、具体的に作中で使うのだが、そのスパナ自体は偶然に拾ったものなのだ。しかもそれを使うことになるまさにその同じ日に。

、、、スパナはただ底に落ちていたのではなく、この世界への突然の物象の顕現だった、、、本来決してここにあるべきではなかった物質、純粋なうちにも

純粹な物質、、そういったものがきつとスパナに化けていたのだ。

われわれはふだん意志とは無形のものだと考えている、、、しかしわれわれの意志ではなくて、「何か」の意志と呼ぶべきものがあるとすれば、それが物象として現れてもふしぎはないのだ。その意志は平坦な日常の秩序をくつがえしながら、もっと強力で、統一的で、ひしめく必然に満ちた「彼ら」の秩序へ、瞬時にしてわれわれを組み入れようと狙っており、、、(「獣の戯れ」新潮文庫 昭和56年 p.41-42)